

企画展

福井藩の医療

～家業、医学所、種痘～

- 主催 福井市立郷土歴史博物館
- 会場 松平家史料展示室・
館蔵品ギャラリー
- 会期 令和4年1月15日(土)
～2月27日(日)

令和元年(2019)に発生した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)により、私たちの生活は大きな変化を強いられました。感染拡大の状況や医療従事者の奮闘がメディアを通じて連日のように報じられ、私たちが受ける医療のあり方が改めて注目されています。

人びとの生存のために医療の質を向上させ、1人でも多くの人に医療を届けようとする試みは、江戸時代から本格化しました。江戸時代は、約260年にわたる安定した政権の下で都市が発展し、豊かな文化が育まれた時代です。しかし、江戸時代の中頃からは、自然災害の頻発に加え、天然痘やコレラなど伝染病の流行がたびたび発生し、富める者と貧しい者との間で受けることのできる医療に格差が広がりました。そのような社会不安への対策として、幕府や諸藩は医療体制の整備を進めていきます。福井藩では、文化2年(1805)に医学所「済世館」を設置して質の高い医師の養成に努め、嘉永2年(1849)には全国に先駆けて天然痘の予防法である種痘を実施するなど、日本の医学史において特筆すべき業績を残しています。

本展では、医師の「家業」、藩の「医学所」、笠原白翁らによる「種痘」に注目し、福井藩における医療の歩みを紹介します。

第1章 福井藩の成立と藩医制度の整備

福井藩の成立により、藩に仕え、藩主とその家族の病気治療や日常的な健康管理、参府の随員などを職務とする藩医の制度が整備されました。一乗谷の朝倉氏に仕えた医師である谷野一栢系統の医術や、栗崎道喜(正元)がマカオで南蛮流の金瘡外科を学び、帰国後に肥前国長崎(現在の長崎県長崎市)で活動したことに始まるとされる栗崎流など、福井藩にはさまざまな医術を家業とする医師たちが召し抱えられていました。福井藩医からは、江戸幕府の4代将軍徳川家綱の針療を命じられた吉田一貞のような優れた人材も出ています。また、9代藩主松平宗昌の遺品には、「楊心流胴譯図」と題する彩色された人体図があります。楊心流とは、医学の導入を特徴とする柔術の一流派です。その「胴譯図」が宗昌の遺品として伝来していることから、宗昌の武術を介した人体への関心の高さがうかがわれます。

第2章 医学所済世館の創設と発展

江戸時代の医者は、主に藩に仕える藩医と、城下や村で民間医療に従事する町医に大別されます。江戸時代後期にあたる弘化4年(1847)、福井城下は武家方・町方を合わせて3万3000人ほどの人口を抱えていたと推定され(『福井市史 通史編2 近世』)、城下に住む人々の医療は町医によって支えられていました。しかし、江戸時代は自由に町医となることができたため、技量が未熟な町医も多く存在していました。また、旧来の藩医の中には、権威を重んじ、上下意識を強く持つ者がおり、医術や学問そのものの衰退が懸念されていました。

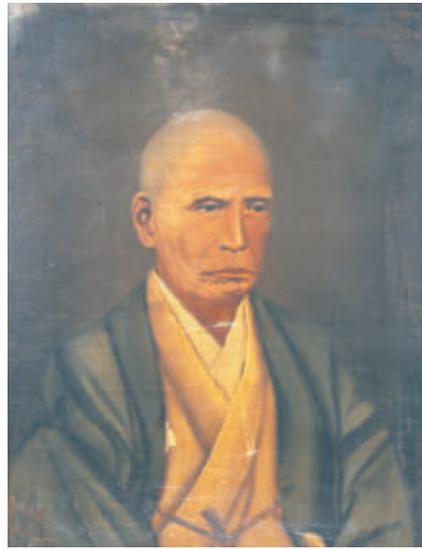
このような背景から、文化2年(1805)、福井藩は医師の子弟の教育機関として医学所「済世館」を創設しました。済世館には町医の出席も認められ、藩医と町医がともに医術を学び、情報を交換できる場として機能することになります。安政4年(1857)からは学習度合いに応じた進級制度を導入するなど、教授役半井仲庵(1812～72)を中心に、藩医と町医の垣根を取り払った実力重視の教育が行われました。済世館の設立後、文政12年(1819)から明治2年(1869)までの期間で130人にのぼる町医が開業し、特に実力が認められた町医には藩医取り立ての道が用意されました。これらの政策を通じ、多くの優秀な医師が福井藩から育っていきました。



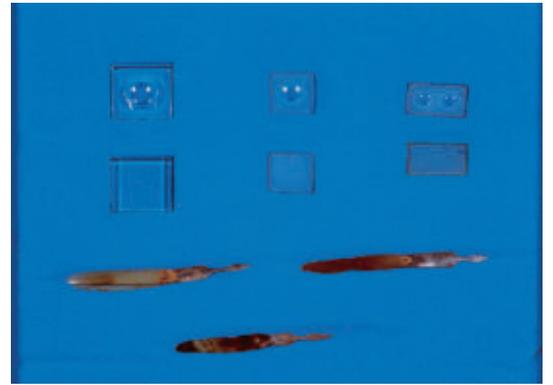
楊心流胴譯図(越葵文庫、当館保管)



医学所濟世館
(昭和戦前期、『稿本福井市史』下に掲載)

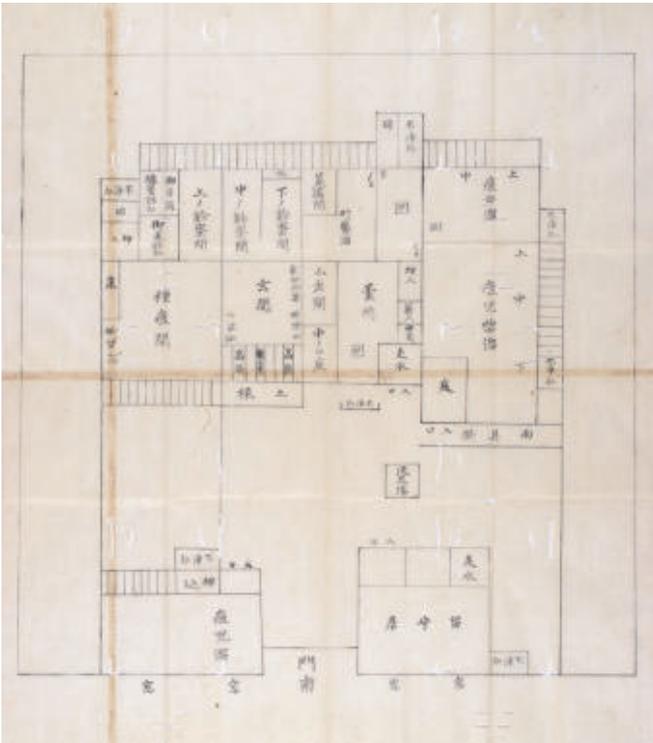


なからいちゅうあん
半井 仲庵肖像画
(当館蔵・福井市医師会寄贈)



笠原白翁所用の種痘器具 (当館蔵)

第3章 種痘の導入と除痘館の活動



江戸時代、死に至る伝染病として特に恐れられていたのが天然痘(疱瘡)です。江戸時代は天然痘の治療法が確立されていなかったため、避けて通ることのできない人生の災厄として甘受するしがなく、周期的な流行によっておびただしい被害が発生しました。

その予防法として登場したのが、牛由来の痘苗(ワクチン)を人体に接種する牛痘種痘術(種痘)です。福井藩では、町医の笠原白翁(良策、1809～80)がいちはやくこの手法に注目し、種痘の導入を繰り返し藩に請願しました。その結果、16代藩主松平春嶽(慶永)の許可を得て、私財を投じて仮除痘館を建設し、嘉永2年(1849)11月25日から接種を始めています。接種にあたり、白翁らは種痘の効用と大切さを説いた「牛痘問答」を出版し、種痘への理解向上に腐心しました。嘉永4年10月、除痘館は藩営となり安定的な運営体制が確立しました。福井にもたらされた痘苗は、富山・金沢・敦賀・鯖江・大野・大聖寺にも伝えられ、北陸地域の天然痘予防に大きな役割を果たしました。

牛痘所図面(滋賀医科大学附属図書館河村文庫)
※下江戸町除痘館の見取図
※展示は写真パネル

主な参考文献

- ・『福井県医学史』(福井県医師会、1968)
- ・永木耕介「柔術・楊心流の特性について」(『武道学研究』15-2、1982)
- ・永木耕介「柔術・楊心流の特性について(その2)」(『武道学研究』16-1、1984)
- ・『福井市史 通史編2 近世』(福井市、2008)
- ・『越前若狭の医学史 -ふくいの医人たち-』(福井県立歴史博物館、2017)
- ・柳沢美美子「福井藩における藩営除痘館の開設とその運営」(『福井県文書館研究紀要』16、2019)
- ・「特集 歴史のなかの疫病」(『REKIHAKU』4、国立歴史民俗博物館、2021)

次回の展示

松平家史料展示室 企画展「描かれた花鳥の美」

令和4年3月3日(木)～4月19日(火)

展示解説シート No.146

令和4年1月15日発行

福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1

電話 (0776) 21-0489 FAX (0776) 21-1489

担当 山田裕輝・中西健太

印刷 備宮本印刷